

SPECIAL FEATURE

# 「人とテクノロジーの融合」を加速し、 新たな価値創造に挑む

社会課題が複雑化し、テクノロジーが急速に進化する中、セコムは「人とテクノロジーの融合」をどのように進化させ、新たな「安全・安心」を生み出していくのか。新サービスの開発、オープンイノベーション、警備DXに携わる3名が、新たなステージについて語り合いました。



(写真左から)

**横尾 直人**  
ビジネスデザイン部  
部長

はぜ かわ  
**沙魚川 久史**  
オープンイノベーション推進担当  
リーダー

**長谷川 精也**  
企画部 兼 トータルソリューション本部  
プロダクト営業部 Securitech・DX  
推進グループ 担当部長

## 社会の変化をとらえ、「現状打破の精神」で未来の「安全・安心」を創造

**沙魚川** 「セコムグループ2040年ビジョン」の策定に関わる中で、前回「2030年ビジョン」を策定した2017年と比べ、社会の不確実性はさらに高まっていると感じました。AIをはじめとするテクノロジーは社会を豊かにする一方、判断の過程が複雑になり、意図しない結果をもたらすリスクもあります。また、人やモノの移動、価値観の多様化が進むことで、従来の延長線上では想定しにくい事象も増えていくでしょう。変化する社会において、変わらぬ安心とは何か。私たちは常に問い続ける必要があります。

**横尾** 新サービスの開発やAIの実装に携わっていますが、テクノロジーの進化は単に速くなっただけではなく、サイバー空間とフィジカル空間で別々に行われていたデータのやり取りが、垣根を越えて融合してしまっています。AIは新たな価値を生む一方で、このデータ自体がリスクの一つとなり、新たな脅威や犯罪が生まれています。私たちには、技術の進化を的確にとらえ、リスクに備えながら活用する力が求められます。同時に、警備の現場でロボットやAIをどのように活用し、人の判断や対応を支援していくか。技術者として日々

向き合っているテーマです。

**長谷川** 私が担当しているのは、省人化やテクノロジーを警備サービスへ実装する領域です。セコムではこれを「Securitech(セキュリテック)」と呼んでいます。Securitechでは特に、これまで人の力に支えられてきた常駐警備に技術を取り入れ、労働力人口が減少する中でも持続可能なサービスをつくることをめざしています。たとえば、AIカメラが対応すべき状況を検知して警備スタッフへ通知する仕組みや、スタッフ間の情報共有を円滑にする仕組みを整えることで、人は判断と異常の対応に集中できるようになります。さらに、巡回や立哨などの警備業務を「セコムドローンXX」、セキュリティロボット「cocobo」、バーチャルキャラクターによるAI立哨などで補完し、人の負担を軽減しながら警備の質を高めることに取り組んでいます。

**横尾** コロナ禍を経て社会のデジタル化が進み、様々な機器やサービスがつながる中で、セキュリティに対するお客様のニーズも広がっています。オンライン・セキュリティシステムだけでなく、監視カメラや入退室管理システムを組み合わせたセキュリティの強化や、他社が提供する設備とも連携してほしいという要望が増えています。ロボットとエレベーターやゲートが連動することに加え、防犯だけでなくリスク管理や事業継続まで支援してほしいという期待もあります。こうしたニーズに、セコムのサービスとしてどう応えていくかが重要です。

**長谷川** 人手不足や人件費の上昇も、技術活用に対する社会の意識を変えています。セコムでは、「cocobo」の公道走行に向けた認定の取得や、ドローンの活用領域の拡大を通じて、社会課題の解決に取り組んできました。一方、新たな技術やサービスが既存の法制度では想定されていない場合も



2025年11月、京都の浄土宗総本山 知恩院で  
セキュリティロボット「cocobo」の運用実証を実施(長谷川)

あります。安全性を確保することを前提に、関係機関と対話し、社会実装に必要な環境を整えていくことも、事業者の重要な役割だと考えています。

**沙魚川** そうですね。社会に先駆けてAIを正しく活用する指針となる「セコムAI倫理憲章」を定めたこともその一例と言えます。セコムは創業以来、企業理念に「現状打破の精神」を掲げ、社会にないサービスを生み出してきました。「安全・安心」をもたらす変革へ挑み続ける姿勢は、今も変わりません。一方、変化が速く、将来を見通しにくい時代には、既存の技術を起点に考えるのではなく、社会や生活の変化をとらえ、何を提供すべきかを起点に構想する必要があります。セコムは、そのための手法としてオープンイノベーションを活用しています。ビッグテックからスタートアップまで多様な企業と共に探索と実装を繰り返しながら共創に取り組んできました。

## 「人とテクノロジーの融合」で、警備の現場を進化させる

**長谷川** 空港や商業施設、複合施設など、人が活躍して警備を運営している現場はたくさんあります。新たな機器やシステムを導入する際は、業務プロセスや現場への定着、通信環

境などを含めて全体を整える必要があります。AIによるデータ処理は飛躍的に進歩しましたが、フィジカル領域での技術進化は、サイバー領域に比べて遅く、特に複雑な状況への

対応が求められる常駐警備の現場では、2040年になっても、人にしかできない判断や対応は残り続けると思います。私たちは最新技術の動向をウォッチし、時流をとらえて新しいサービスを創っていきます。

**沙魚川** 必要なときに人が現場へ駆けつけて対応する体制を維持していることは、セコムにとって大きな強みです。その上で、従来のように異常を検知してから対処するだけではなく、異常の兆候をとらえ、事態が起こる前、あるいは深刻化する前に対応する「プロアクティブなサービス」へ進化させたいと考えています。それにより、人の負担を抑えながら、より多くのお客様に安心を提供することも可能になります。リスクは正常と異常に明確に分かれるのではなく、日常の中で連続的に変化しています。その小さな変化を早期に可視

化することが、プロアクティブな価値の起点になります。

**横尾** そこにAIを活用することで、お客様に提供するサービスと当社の業務の双方をさらに高度化できます。たとえば、「同じ事象が繰り返されている」「昨日までと状況が異なる」といった変化をAIで分析し、セコムが培ってきた知見や現場で培われたノウハウと組み合わせれば、状況をより的確に判断できます。警備スタッフへの対応支援や、機器のメンテナンス時期・方法の提示にも活用できるでしょう。また、機器のメンテナンス作業の一部を遠隔で行えるようになれば、緊急対応員の出勤を抑え、サービス品質と生産性の向上を両立できます。通信インフラなどの整備も必要ですが、実現に向けた技術的な可能性は広がっています。

## 顧客接点と現場知見が、未来の安心を支える

**長谷川** どれほど技術が進化しても、「安全・安心」を受け取るのは人です。一方的に技術を提供するのではなく、利用する方のニーズや受け止め方を踏まえ、一歩先の価値を提案することが私たちのめざすプロアクティブだと考えています。警備員が現場で感じ取る小さな違和感や変化には、長年の経

験に基づく知見が含まれています。こうした知見を、ロボットやAIなどを通じて現場データとして蓄積・活用できれば、新たなサービスにつなげられます。事業所・家庭向けのセキュリティを通じて築いてきた幅広い顧客基盤と、人による継続的な接点は、セコムならではの強みです。

**横尾** 技術を活用して「安全・安心」をプロアクティブなものへ進化させるには、セコム単独の取り組みだけでは十分ではありません。企業間の連携やオープンイノベーションに加え、社会実装に向けた制度面の議論も必要です。また、セコムは安全性と確実性を重視してきたからこそ、技術を迅速に取り入れながら、その品質と信頼性をどのように担保するかが重要になります。たとえばホームセキュリティも、40年以上にわたりお客様にご利用いただき、ご意見を踏まえて改善を重ねることで、サービスインフラとして成長してきました。経営が長期的な視点で投資を行い、粘り強く取り組む姿勢はセコムに根づいています。そうした挑戦の過程で社員が経験を積み、次世代の人財育成にもつながっていると考えています。

**沙魚川** セコムが事業を通じて築き上げてきた社会との接点

や現場知見は、技術を社会実装したいパートナーにとっても大きな価値です。自社で開発すべきものは自社で取り組み、外部に優れた技術があれば積極的に連携しています。また、セコムはサービスの会社であり、お客様の安心につながるサービス体験の創造を大切にしています。プロアクティブな

## セコムが描く「先回りの安心」の未来

**長谷川** 日本では早くから、労働力人口の減少を見据え、いづれ技術による支援が不可欠になると認識されてきました。セコムも、ロボットをはじめとする技術開発を継続的に進めてきました。近年はロボット活用への関心が高まり、社会のニーズと結びつき始めています。セコムが磨いてきた技術は、現在自社のサービスだけでなく、パートナーとなる他の警備会社でも活用されつつあります。今後は警備業界全体の課題を解決するためにより広く役立てていきたいと考えています。

**横尾** 安心の実現方法は時代とともに進化していきます。今回「セコムグループ2040年ビジョン」で打ち出したプロアクティブな「安全・安心」の提供において、その実現を支える重要な技術の一つがAIです。将来、AIが電気や水道のような社会インフラとなれば、新たな犯罪や脅威も生まれるでしょう。そうした変化を見据えながら、安全の在り方と人々が感じる安心を探求し、社会に先回りしたサービスを提供していくことが重要だと考えています。

**沙魚川** 2025年末から進めている「SECOM Acceleration Program 2026」では、プロアクティブな商品・サービスを共創するパートナーを公募し、多様な提案をいただきました。このプログラムを起点に、新しい「先回りの安心」を具体的な価値として形にしていきたいと考えています。今後は、セキュリティに限らず、メディカルサービスでは健康上のリ

サービスを提供して、セコムに任せておけば何か起きるリスクも減るといったように、顧客接点の時間軸を事前側にも拡大させていくような、新しい体験を創るべく取り組んでいます。

スク、地理空間情報サービスでは国土や災害のリスクを早期にとらえるなど、グループ全体でセンシング技術や収集したデータを「先回りの安心」につなげ、グループの幅広い領域で、「人とテクノロジーの融合」を推進し、さらに強化して、プロアクティブに「先回りの安心」という新しい価値創出を進めていきます。セコムグループ全体で、「変わりゆく社会に、変わらぬ安心を。変わり続けるセコム。」というメッセージを表現していきます。



「SECOM Acceleration Program 2026」の最終ビッチ審査会では社内各セクションの役員・責任者が審査員を務めた(沙魚川)



ビジネスデザイン部の拠点HARAJUKU 3rd place  
柔軟な発想で先端技術の活用を推進する(横尾)